http://www.tfu.ac.jp/liaison/edu/navi_PDF/navi06-04.pdf　を引用（2014/July/17）

４．ＫＪ法をやってみよう

1　ＫＪ法とは？

〔１〕ＫＪ法の由来

「ＫＪ法」とは、蓄積された情報から必要なものを取り出し、関連するものをつなぎあわせて整理し、統合する手法の一つです。

カード（紙片）を活用するところに大きな特徴があり、内容や質がまちまちな情報をまとめ、全体を把握するのに有効な技法です。

日本の文化人類学者・川喜田二郎氏（元東京工業大学教授）が考案した創造性開発（または創造的問題解決）の技法で、川喜田氏の氏名の頭文字をとって“ＫＪ法”と名付けられています。

このテキストでの説明は、主として川喜田二郎氏の著作（『発想法』中公新書、1967 年；『続・発想法』中公新書、1970 年）による。

〔２〕ＫＪ法の汎用化

ＫＪ法は、もともと川喜田二郎氏が文化人類学者としての自分自身の学術調査のデータをまとめるため、および、調査団のチーム作りのために考案したものです。

その後、川喜田氏自身および周囲の研究者たちの協力によって、さまざまな発展型を生み出しており、個人の思考、会議での意見集約などに用いられ、例えばまちづくりの分野などでも計画段階での住民意見の集約や、設計段階における関係者の意志統一などに応用されています。

〔３〕ブレインストーミングとＫＪ法

ブレインストーミングは、新たなアイデアを生み出すための方法の一つです。

ＫＪ法は、ブレインストーミングなどによって得られた発想を整序し、問題解決に結びつけていくための技法です。

４）ＫＪ法の基本

まずは、ブレインストーミングなどで出されたアイデアや意見、または各種の調査の現場から収集された雑多な情報を１枚ずつ小さなカード（紙キレ）に書き込みます。

次に、それらのカードの中から近い感じのするもの同士を２、３枚ずつ集めてグループ化していきます。

続いて、それらを小グループから中グループ、大グループへと組み立てて図解していきます。

さらに、必要に応じて図解を文章化していきます。

こうした作業の中から、テーマの解決に役立つヒントやひらめきを生み出していきます。

ここでいう“グループ”とは人間の集団ではなく、カテゴリー（領域）と解釈されたい。

2　ＫＪ法の手順

〔1〕ステップ１．『キーワード収集（カード記録）』

「探検」と呼ばれる段階で、探検には、外部探検と内部探検とがあります。外部探検とは、様々な目的による調査の現場で情報や事実を収集することです。内部探検とは、関係当事者の頭脳の中を探検することで、各自の頭脳に蓄えられた知識や経験をブレインストーミングなどによって吐き出すことです。

収集された情報は１つ１枚ずつ、小さな「カード」に書き込んでいきます。

「カード」には【ポストイット】を用いると便利。あるいは、本学ホームページ「リエゾンゼミ・ナビ『学びとの出会い』」の「その他の資料」の「KJ 法紙片（ラベル）ひな型」(A4 版)を B4 版に拡大コピーし、事前に学生に渡して切って持ってきてもらう。

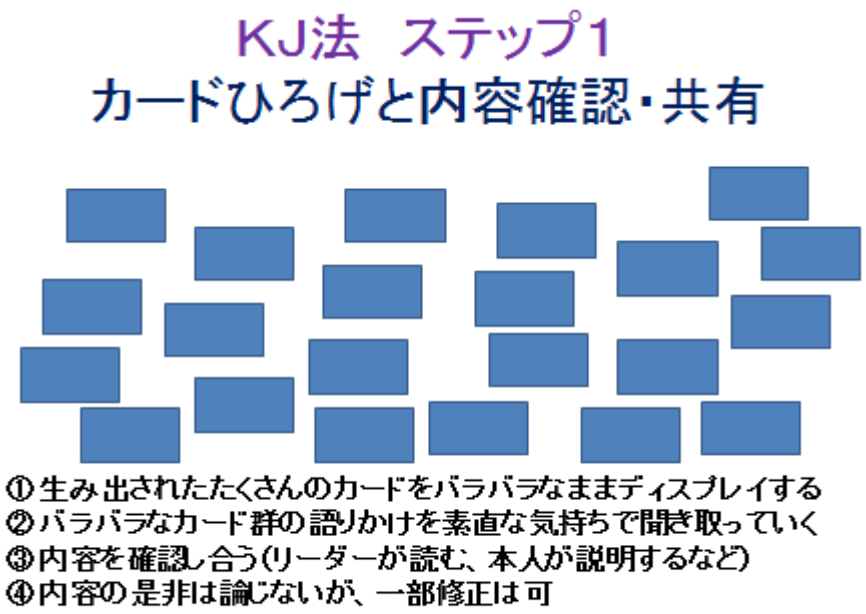
※カードへの記録の仕方

①テーマを決め、関連すると思われる事実や意見をできる限りカードに記録する。

②この際、内部的な情報だけではなく、外部から収集した情報も扱う。

③記録するときは一枚のカードに一つの情報を記録するようにする。

④たとえ“もやもや”したままでも、とにかく書き出していく。



この段階がとても大切であるため、十分に時間をかけること。

〔２〕ステップ２．『グルーピング』

カードのグループを編成していく作業で、さらに次のような段階に分けて進めていきます。

１）カードひろげ

カード群を机の上などにディスプレイして、１枚１枚のカードに書かれた内容を丹念に読みとっていきます。

カードの心に聞き、カードが言わんとする言葉の奥を汲み取る。

２）カードあつめ

・近い感じのカードを集めます。
・たくさんでなくともよいです（２、３枚ずつでも構わない）。
・いわゆる“離れザル”、“一匹狼”は無理にどこかへ入れないようにします。
・あわてず、ゆっくり、息の長い根気で。

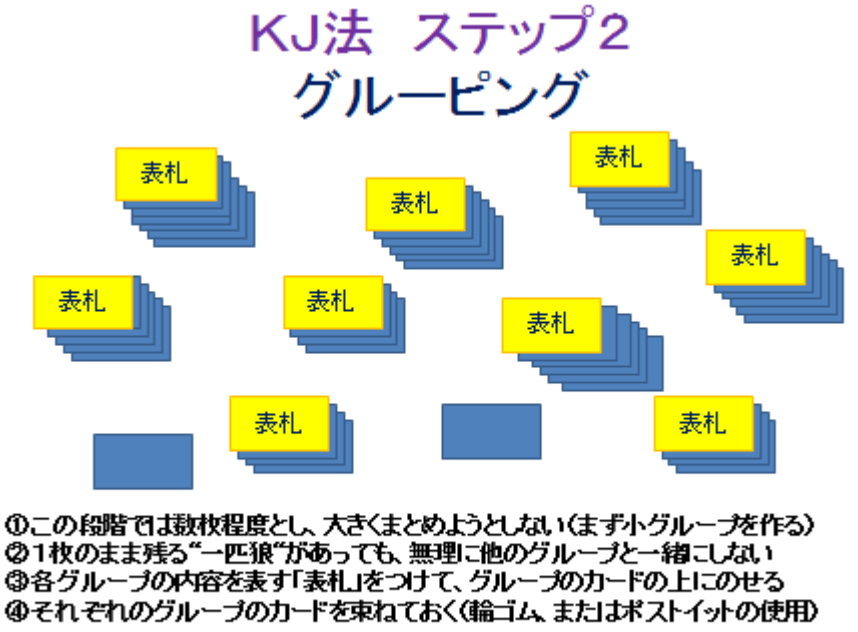
３）表札づくり

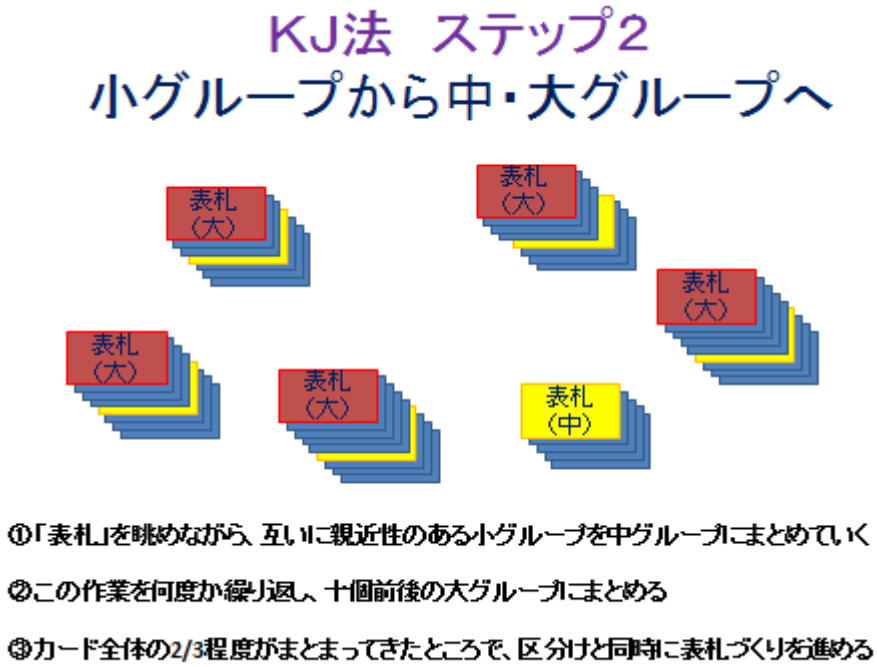
・カードのグループに「表札（タイトル）」をつけます。
・カードたちの意味（心）をぴたりと言い表します。
・ソフトでズバリの表現で。
・元の言葉の土の香りを残します。

表札は新しいカードに赤字や青字などで書く。

・カードのグループは、まず小グループを作り、次に小グループ同士で中グループを、そして中グループ同士で大グループを作っていきます。

色分けして書き、クリップや輪ゴムで束ねていく。

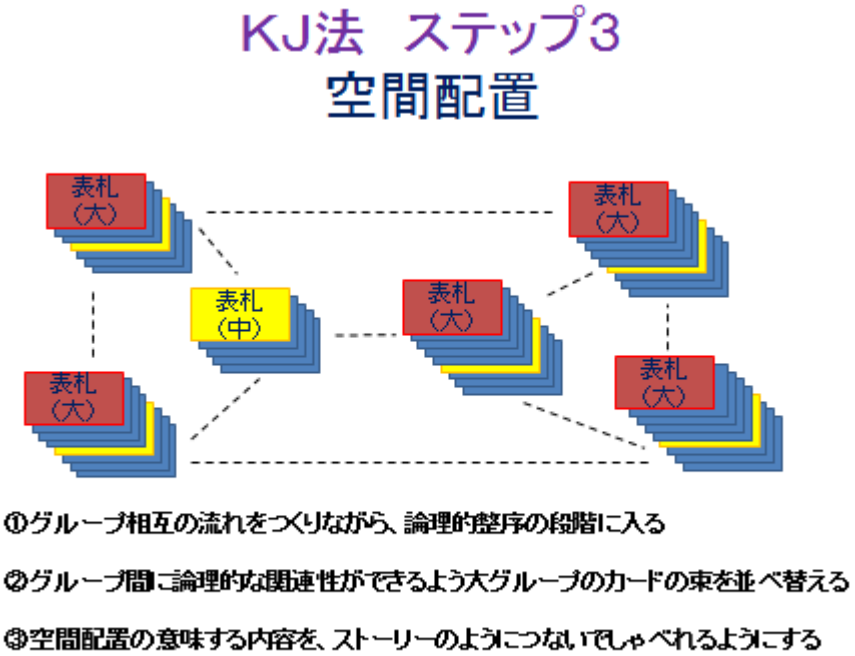


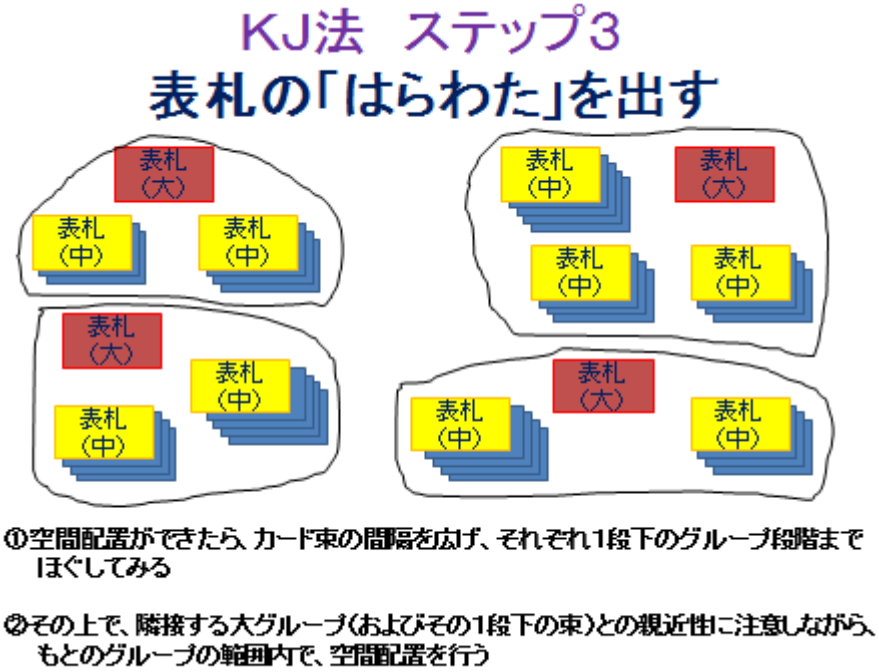


〔３〕ステップ３．『空間配置』

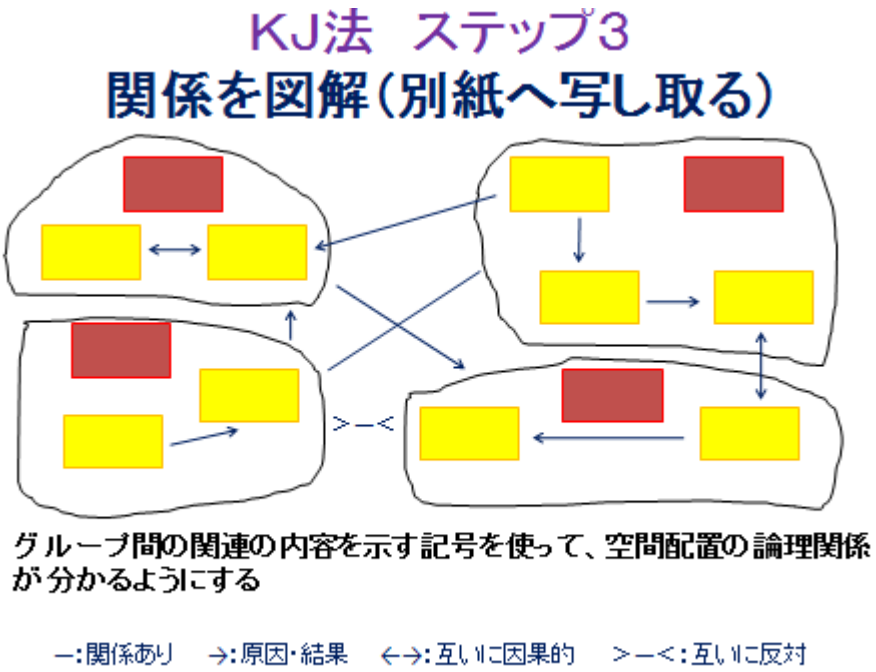
中グループや大グループへと組立てられて、クリップや輪ゴムで束ねられたカードの束を模造紙などの上で空間的に配置をして、姿・形をもったものにしていきます。

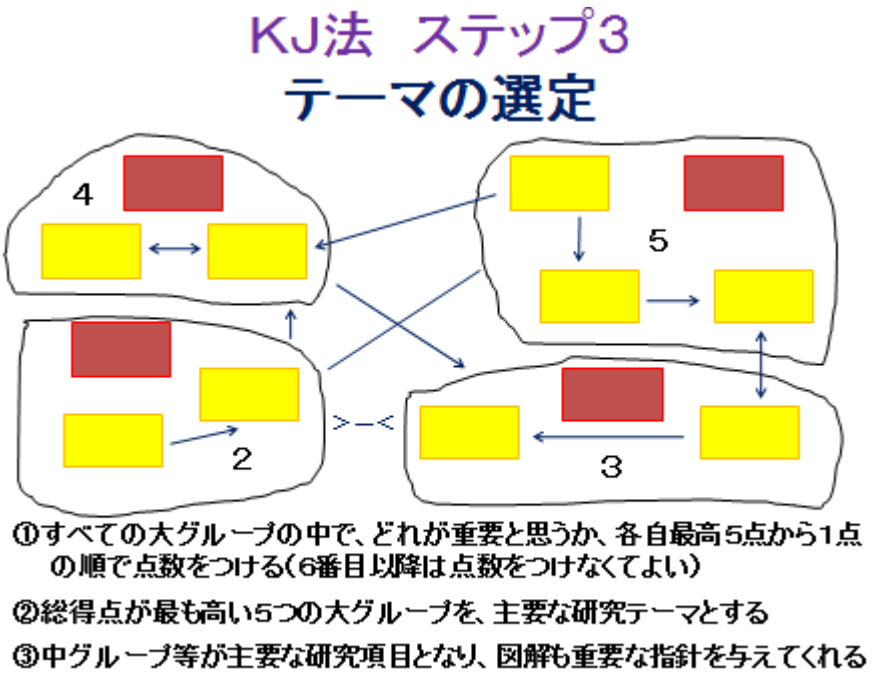
内容の近い束を近くへ。「目的と手段」「原因と結果」などの“ストーリー”をつぶやきながら進める。





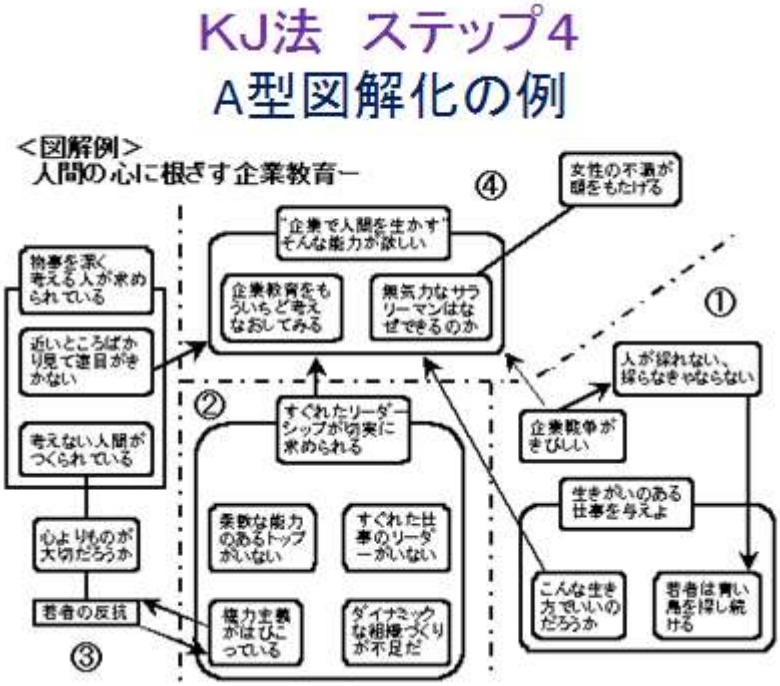
徐々に輪ゴムやクリップの束を解き、“はらわた（カード群）”を出していく。





〔4〕ステップ4．『A型図解』

輪どりや線などで、グループ同士の関係を表示し、全体が姿・形を持った図解となるようにしていきます。



〔５〕ステップ５．『Ｂ型文章化』

１）Ａ型図解を元にして論文や記事などに文章化していきます。

２）「Ｂ'型」として簡略化して口頭で発表説明します。

３）ＧＢＳ（グラフィカル・ブレイン・ストーミング）として、図解を土台に再度ブレインストーミングを実施し、発想を発展させていくこともあります。

この段階でうまく文章化できない場合は、図示の段階に原因があると考えてもう一度やり直す必要がある。

それまでの作業の途中で得られたヒントなどは新しくカードに書き留めて、同じ手順を繰り返し、内容を深めていくことも可能である。これについては「累積ＫＪ法」と呼ばれている。

◇ ＫＪ法運用上の留意点

ＫＪ法は、次のような使い方をすると効果的です。

① 問題の正体がはっきりしない時。それを明確化する。

② 周辺情報を幅広く収集する。

③ カード化された情報は、バラバラなままディスプレイする。

④ バラバラなカード群の語りかけを素直な気持ちで聞き取る。

⑤ バラバラな情報群の中から、次第に紙切れたちが集まってきて、問題が形成され、構造化されるように思考する。

⑥ グループで取り組むことによって、衆知結集の効果や、チーム作りの効果を期待できる。